

那史学会の概要

「伊那史学会」のあゆみと特徴

伊那史学会は、郷土誌『伊那』を基にして郷土の歴史・民俗・自然などを調査・研究し、月刊『伊那』を刊行する郷土の歴史愛好者らによる幅広い組織であり団体である。

『伊那』の創刊は、昭和13年11月、織物業若松屋の林栄氏による営業広告誌『はたの友』（昭和12年11月発刊）を、『伊那』と改題し発行した時に始まる。その後、昭和15年11月号から会員制とし、山村書院に経営が移ったが、昭和17年6月休刊。そこで下伊那教育会の歴史部員および同人らが「伊那郷土史学会」を組織し、代表者に市村咸人先生、編集主任に福島豊先生があたり発行を継続した。しかし、昭和19年3月、戦局逼迫とともに軍部の圧力も加わり、遂に「廃刊の辞」を掲げて廃刊となった。

昭和27年8月、初代原田島村（増蔵）が発行を引き受け、『伊那』が復刊を果たした。編集委員には市村先生を筆頭に錚々たる郷土史家の諸先生があたり、「伊那史学会」が組織された。当初350部で再発刊された『伊那』は、原田島村老夫妻の献身的努力とともに発展し、昭和57年の復刊30周年には5,000部に達した。一地域の月刊の地方雑誌としてこの部数は他に類がない。令和4年12月号までの『伊那』の刊行数は、通巻第1136号第71巻第1号、復刊846号に及んだ。

この『伊那』の発行以外にも、伊那史学会はさまざまな活動を行ってきた。その一つ、「郷土巡礼」は、郷土の歴史をより深く理解し知るための史跡探訪として、昭和28年7月から始まり、その数は466回に及んだ。

昭和30年1月からは、毎年1月の総会である「年次大会」が開始され、各部門の学術講演が開催された。昭和31年頃からは、地域組織として旧町村単位での史学会結成の動きが始まり、最大時には各町村に30以上の史学会が組織され、それぞれに地域の史跡の保存、民俗や伝承の収集のほか古文書学習会など活発な活動を行ってきた。この町村史学会こそが「伊那史学会」の最大の基盤であり、地域活動を通じて郷土の歴史、文化を守り育ててきた意義は大きい。また、昭和39年1月から『伊那』誌面で始まった「古文書クイズ」が引き金となって、多くの町村史学会で古文書勉強会が活発になった。

その一方では、郷土の生んだ天才画家「菱田春草」記念館設立を訴え、平成元年の飯田市美術博物館開館へと繋がった。また、柳田國男記念伊那民俗学研究所の設立、春草の絵画「菊慈童」購入などを積極的に本会あげて支援し、「田中芳男胸像復活」や「伊原五郎兵衛碑移転」の募金活動にも協力した。

以上のように、復刊から70年間、原田島村3代(増蔵・眞・望)によって担われた『伊那』の発行と伊那史学会の活動は、当地方の学術文化発展に大きく寄与し、その功績は大変に大きいといえよう。

「伊那史学会」と『伊那』の継承

近年、伊那史学会の会員数は、高齢化や活字離れによってしだいに減少してきた。さらに、これまで伊那史学会を支えてきた原田家には後継者がいないため、令和4年末をもって活動を終了せざるをえない事態となり、『伊那』の廃刊と伊那史学会の解散も危惧された。

しかし、会員数が減少したとはいえ、なお800名余を擁しており、『伊那』の廃刊は当地方の学術文化の衰退を意味する。そこで関係者の間で継続の方策が模索された。

その結果、令和5年1月号からの『伊那』の発行を、原田家に代わって南信州新聞社(関谷宏二社長)が引き受けることとなり、その編集は山内尚巳代表以下が当地方の郷土研究者が編集委員会を組織して、以後も歴史ある「伊那史学会」の名称を引き継いでいくこととなった。ただし、伊那史学会の特徴であった年次大会や郷土史巡礼などは実施せず、町村史学会との直接的な関係も解消される方針である。

ともかく、これまで原田家の献身的な努力と、それに賛同する会員の協力によって発展してきた伊那史学会は、今後も『伊那』の刊行を主体として継続することとなった。これまで以上に、地域の方々のご支援と、会員の方々のご協力を御願ひする次第である。

伊那史学会 〒395-0152 飯田市育良町2-2-5 南信州新聞社
TEL 0265—22—3734
Eメール book@minamishinshu.co.jp